＜研究成果の紹介＞

出開度からみた「みえうえじま」の一番茶摘採適期

農業研究所　茶業研究室

1．成果の内容

県内の生産者によって育成された茶の新品種「みえうえじま」は、「やぶきた」より摘採時期が２～３日早く、生育が旺盛でかつ少肥栽培への適応性も高く、新植・改植における県独自品種として有望視されています。しかし、本品種の生育特性は「やぶきた」とはかなり異なるため、品質向上のための栽培技術の確立が必要です。ここでは、煎茶栽培における一番茶芽の摘採時期と収量・品質の関係について検討し、摘採適期を明らかにしました。

１）「みえうえじま」は「やぶきた」に比べて、出開き初期の段階から収量性が高く、その後の収量も「やぶきた」に比べて著しく増加します。「みえうえじま」の生葉収量は出開度20%で約600kg/10a、同40%で約800kg/10aと同出開度の「やぶきた」の約1.6倍です（図１）。

２）「みえうえじま」の一番茶荒茶成分について、うま味に関係する全窒素、遊離アミノ酸、テアニン含量は「やぶきた」に比べて高いレベルにありますが、出開度40%以降には低下し、粗繊維（NDF）も出開度40%以降に急激に増加します。また、渋みに関係するタンニン含量は「やぶきた」とほぼ同等のレベルでありますが、苦みに関係するカフェイン含量は「やぶきた」より高く、特に出開き初期の段階において高い傾向がみられました（図２）。

３）「やぶきた」の官能評価値が出開度40～70%で良好であるのに対し、「みえうえじま」の官能評価値は出開度10～40%（摘芽長6cmまで）で外観、内質ともに良好です。しかし、出開度50%以降は形状が大きくなり、茎が目立ち、外観品質の低下が顕著になります。

以上の結果から、「みえうえじま」煎茶栽培において、品質が良好となる一番茶の摘採適期は、出開度で20～40%であり、その時期の摘芽長は約6cm、生葉収量で600～800kg/10a程度と考えられました。

2．技術の適用効果と適用範囲

改植･新植時の品種選定の基礎資料となります。

3．普及・利用上の問題点

１）本試験は礫質赤色土壌、樹齢11～13年生の成木において2007年に実施しました。

２）摘採が遅れた場合は、二段刈りにより品質を維持してください。

（青　　久：現伊賀農業研究室）

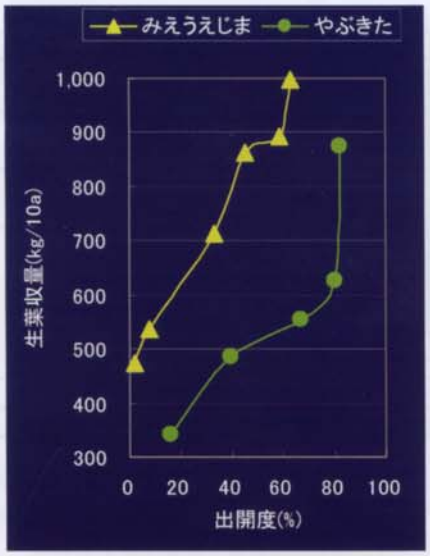

図１　一番茶の出開度と生葉収量

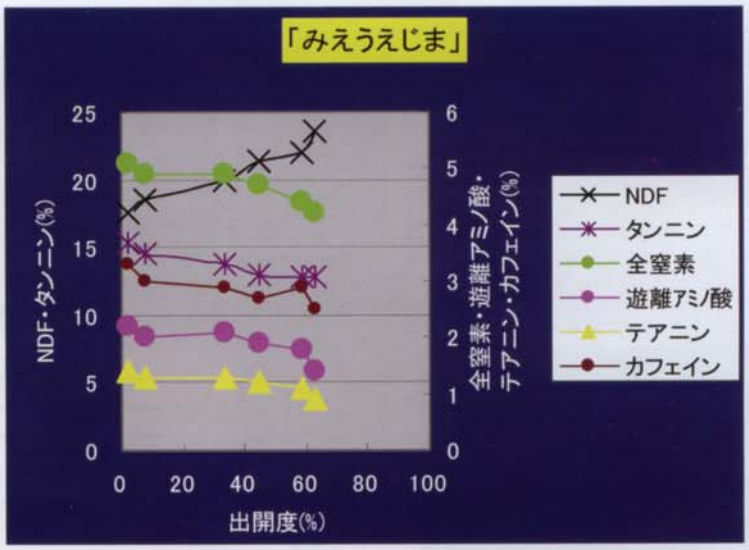

図２　一番茶出開度と荒茶成分